

# Newsletter for JADR

## I. 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 会長に就任して

JADR会長 高野 吉郎

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科硬組織構造生物学分野)

小田 豊前会長 (2007-2008) の後継として、本年1月1日付けで第28代JADR会長に就任いたしました。奥田克爾会長 (2001-2002) が編集され、大谷啓一会長 (2005-2006) の在任時に刊行されたJADR設立50周年記念誌「JADRのあゆみ」には、高橋新次郎初代会長 (1954-1958) 以来の歴代会長のお写真とともに、これまでJADRの発展に豪腕を發揮してこられた諸先生の筆による、JADR黎明期から今日までの変遷の様子が生き生きと描かれております。わずか16名の会員でスタートしたJADRを、会員数2,000名を超える世界第二のDivisionへと発展させた偉大な先達の力量を知りそのご努力の跡を見るにつけ、会長を拝命することの責任の重大さを身にしみているところであります。未曾有の経済不況の只中での船出ではありますが、過去8年、4人の会長の下で理事を務めさせていただき、JADRの国内、国外での役割や今後克服すべき課題についてはそれなりに学習できたと思っております。新体制となりました理事会役員、評議員、会員諸兄のご支援を賜り、日本の歯科医学の世界への発信母体としてのJADRの一層の強化と活動の推進に微力を尽くしたいと考えております。

小田前会長は就任時のニューズレターで、JADR学術大会の意義について、色々な声が聞こえる、と述べておられます。設立時より「国際的に業績顕著な研究者」を擁して活動してきたJADRが、長く本邦歯科医学界選りすぐりのエリート集団であったことは間違いのないところですが、1980年に大阪で第58回IADR世界大会が開催されるのが決定したのを機に、会員倍増キャンペーンが行われたと聞いておりますが、それでも敷居は高く、入会には一定以上の研究業績と著名な学会員の推薦が必要とされておりました。事実、1984年にJADR年次大会が初めて東京、大阪を離れて新潟で開催された際に、現地スタッフとしてお手伝いをさせていただいた私どもに、JADR入会のお誘いは一切なかったと記憶しております。翌1985年に、当時JADR事務局長をしておられた常光 旭先生のご推薦をいただいてJADRへの入会を許されましたが、その際に、日本からIADRの会員資格を申請するためには、そのDivisionの会員、すなわちJADR会員とならなければならないと定められていることを知りました。この入会のプロセスは今も基本的に変わらないところですが、当時不自由に思われたこの仕組みが、今ではJADRとIADR本部との一体感と、JADRの活動の独自性を保つ上で非常に有効に働いていることを実感しております。翻って現在のJADRの会則を見ると、正会員は「本会の目的に賛同し、入会を希望する者」とだけ記されています。大学院生はもちろん、歯学部学生にも広く門

戸を開放しています。嘗て会員資格が厳しく審査された時代からすっかり変貌したこの状況をどう見るかは、ご意見のあるところかと思いますが、過去数年間携わってきた Hatton賞国内代表選考会での審査と、2005年から2007年までIADR本大会で同賞の最終審査にあたらせていただいた経験から、これからのJADRが推進すべき活動の柱の1つが見えてきたように感じております。

ご承知のようにHatton賞は、第10代IADR会長のEdward Hatton博士の功績を称えて設けられた若手研究者を顕彰するための賞です。例年JADRでは国内審査を勝ち抜いた5名がTravel Awardを授与され、IADR本大会の前日に行われる本選に出場します。Hatton賞の審査は、本選はもちろん国内予選もすべて英語で行われるため、日本人にとってはかなりタフなコンテストですが、例年、このコンテストに果敢に望む若者達の勇氣と熱意には感動を覚えます。上位通過者のレベルは高く、事実、JADRはこれまでに本選1st prize 受賞者3名、2nd prize受賞者1名を輩出しています。日本の歯学研究をリードしてこられた方達の多くは嘗て積極的に海外に出て、そこでの経験と研究実績、人脈を基盤に自らのサイエンスを発展させて歯学の進歩、向上に寄与して来られたと思われまふ。JADRは将来の世界をリードする日本発の基礎・臨床歯学研究者とアカデミックドクターを育むべく、若者を鍛え、海外へ送り出すインキュベーターとしての役割を果たすことが使命の一つではなかろうかと考えております。

JADRは日本の歯科医学の世界への発信母体であり、将来の日本の歯科医学研究を担う若者が世界へはばたくカタパルトといえます。その意味で、長年にわたり曖昧であった日本歯科医学会とJADRの関係が明確となり、JADRが日本歯科医学会の国際学術交流の窓口として認定されたことは、大きな進展であります。日本歯科医学会が発行し、世界の関係機関へ送付している英文学術雑誌 The Japanese Dental Science Review の掲載論文の著者の多くが、JADR会員であることも意味あることです。

JADRはアジアの歯科医学研究をリードする拠点としての役割も期待されております。既にご承知のように、本年の第57回JADR総会・学術集会是、中国、Wuhanで開催される2nd IADR PAPF / 1st IADR APR Meeting (会期9月22日～24日)との共催となります。会員の皆様の奮ってのご参加を願いますとともに、JADRの活動へのご支援、ご協力をお願いして、会長就任のご挨拶とさせていただきます。

## II. 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 会長任期を終えて 貴重な2年間の経験

JADR 前会長 小田 豊

(東京歯科大学歯科理工学講座)

大谷啓一前会長を引き継いで、2007年1月より2008年12月まで2年間会長の任を務めさせていただきました。

学術大会開催、IADR本部への委員の推薦、Hatton賞選考、IADR council meetingへの役員派遣、など例年の取り組みに加えて課題としたことの一部しか遂行できず、次期執行部に宿題を多く残した感がありますが、任を終え肩の荷が下りた気分しております。

会長就任時に、任期中に行うべき課題として、PAPF (Pan Asian Pacific Federation) meetingの開催、法人化の検討、新方式での次期会長選挙、公開シンポジウム、JDR投稿支援、若手研究者の国際学会での発表支援、アジアからのJADR学術大会への参加支援、などを挙げました。

PAPF meetingは第84回IADRプリズベン大会(オーストラリア; 2006年6月)と併催で第1回目が開催され、第2回目となるものですが、IADRの新たな「regionalization plan」の下にChinese Divisionが担当して今年、The 2nd Scientific Meeting of IADR PAPF and the 1st Scientific Meeting of IADR APRとして9月22日(火)～24日(木)にWuhanで開催されます。PAPFの各divisionが共催することになっており、第57回JADR学術大会もWuhanで開催することになります。学会の法人化は、任意団体から法的に認知された団体とし、公益を目的とした事業活動を展開する法人となることを目指したのですが、2008年12月の新たな一般法人法・公益法人法の施行後に再検討することになっております。新方式での次期会長選挙は、会長選出の経緯がよりオープンとなるように、これまでの信任方式を改めIADRの会長選挙に準じて候補者選考委員会から推薦された候補者を会員の投票で選出する方式に変更されました。この方法で昨年、次期副会長として村上伸也先生が選出されました。公開シンポジウムは、今秋「歯科分野の機能食品開発におけるトランスレーショナル・リサーチ」をテーマとして歯科医学会と共催で開催される運びとなっております。アジアからのJADR学術大会への参加支援については、JADR Travel AwardとしてPAPFの各divisionに案内され、第55回学術大会では中国と韓国から各1名、第56回学術大会ではオーストラリア、中国、モンゴルから各1名の受賞者があり、次第に周知されつつあるように思います。

退任に当たり、任期中に起きた2つの事柄を記しておきたいと思っております。ひとつ目はIADR Vice-president (2008-2009)の選挙結果から学んだことです。JADRとしては奥田克爾先生を推薦し、3人の候補者リストに掲載されるところまで行きました

ので、Vice-presidentとしての選出を願い、会員各位はもとより周囲の諸国にも投票の依頼をお願いして来ましたが、残念ながら3人目の日本人IADR会長の出現には至りませんでした。今後に繋がる貴重な成果と考えます。この選挙を通して、研究者としての知名度もさることながら、IADRの本部役員や委員会のメンバーとして活躍する人材を積極的にJADRから送り出すことが大切と感じました。

二つ目は日本歯科医学会との連携です。歯科医学会ではこれまでの専門分科会に加えて認定分科会制度を採用しましたが、JADRは他の専門分野をベースにした学会と異なるところから専門分科会や認定分科会の申請は行ってきませんでした。そこで、「JADRは専門分科会や認定分科会としての位置づけでなく、日本歯科医学会と連携協力して日本の歯科医学の国際的研究活動の発展に貢献する学会としての役割を果たす」との合意のもとに一昨年より相互の理事会へ役員派遣を行い、協力関係を模索してきました。その一端として、歯科医学会長のIADRのCouncil meeting出席、IADR事務局長の歯科医学会総会出席、公開シンポジウムの共催などに結びついております。更に緊密な連携が保たれ、日本の歯科医学領域における国際的な研究活動の推進の一翼をJADRが担えればと期待しております。

近年、会員数は2,000名前前後で推移しておりますが、一昨年JADRの会員数が前年より大幅に減少する事態となりました。自分の任期中に会員数が大きく減少したことに呵責の念を抱きましたが、IADRプリズベン大会で入会した多くの日本人会員が翌年は会費の納入をしなかったために生じた現象でした。2001年の幕張大会の後にも同様の現象がありました。今日の歯科医療を取り巻く環境は、基礎歯学と臨床歯学を融合したエビデンスに基づく歯科臨床や国際的視野が益々重要になってくるものと思います。IADRの会費は滞納すると会員資格が失われますので、一時の大会のみでなく継続して会員資格の更新をお願いいたします。

最後に、この間に賜りました会員諸氏をはじめ役員の方々のご支援、ご指導に改めて感謝すると同時にお礼申し上げます。今後も引き続きJADRの活動への積極的な参加をお願いしまして、会長退任の挨拶といたします。



就任初回の理事会



## Ⅲ. 新任・退任理事からの挨拶

### 1. JADR退任理事からの挨拶

大東 道治

(大阪歯科大学小児歯科学講座)

4年間理事をさせて頂きましたが、荷が重く何もできませんでした。就任当時に妻を亡くし、毎年のように、海外をほつり歩き、人様が行かれた所や登られた山々で未だ行ってない所は、国内外を問わず無いぐらいですが、ここ4年間では、Sydneyに4年前、Kuala Lumpurに昨年の6月に行ったぐらいで出無精に成りました。その上、3度とも、学術大会当日に身内に不幸がおこり急遽帰阪しなければならなくなり大会長様には大変ご迷惑をおかけしましたことを不謹慎ですが、この場をかりお詫び申し上げます。

ただひとつ、村上先生とJADRの会長選のお世話をさせて頂いた折、選挙方法を改善していただくよう理事会にお願いしました。今までの選挙方法では承認を得る投票方法でしたが、会長候補者としての条件が整っておれば自薦他薦を問わず、会長候補者として立候補でき、手続きを踏んで、選挙ができるようになりました。その一回目の会長さんがいみじくも村上先生が御就任されました。この規則の改正以外これといったたいしたことはできませんでしたが、この後に立派な理事の先生方がいらっしゃいますので、JADRが益々発展し、この会から、また、IADRの会長さんが選出されることを祈願し、退任の御挨拶にさせて頂きます。

永い間お世話になりました。本当に勉強になりました。有難うございました。

### 2. JADR理事の退任にあたって

平井 敏博

(北海道医療大学歯学部咬合再建補綴学講座)

この度、理事を退任させて頂きました。2年間という短い期間でしたが、お世話になりました皆様に心から御礼を申し上げます。

“Time flies.” といいますが、私にとっては実に早く経過した2年間でした。一昨年2月の「就任にあたって」のご挨拶で、歯科医学研究は教育と臨床を支えているばかりではなく、これからの羅針盤でもあるため、学術研究活動は不可欠である旨、その唯一の総合学会であるJADR/IADRの発展のために微力ながら尽力いたす所存である旨を本ニュースレターに記載いたしました。本会理事の役割のひとつに、各賞受賞者の選考がありました。多少の苦勞もありましたが、無事にこの務めを終え、安堵しております。すなわち、第85回IADR大会(Toronto)と第86回大会(Miami)における「JADR Hatton Award候補者」と、第55回JADR大会(大会長：前田伸子教授・鶴見大)と第56回大会(大会長：中垣靖男教授・愛知学

院大)における「学術奨励賞」の選考でした。わが国の若い歯科医学研究者が世界中の仲間に対して堂々と自身の研究成果を発表する姿勢を頼もしく思いました。また、JADR学術大会長のご苦勞を目の当たりにしました。大会参加者はそれほど多くないにしても、研究分野が非常に多岐にわたるため、特別講演やシンポジウムのトピックおよびスピーカーの選定に関する大変さは、いかばかりであったかと推察します。前田先生、中垣先生のご尽力に敬意を表します。本当にお疲れさまでございました。

喜ばしいことがありました。それは、この2年間に本会と日本歯科医学会(以下、「学会」とします)との間に確固たる交流関係が築き上げられことです。本会理事として、また学会常任理事の一人として嬉しく思いました。小田先生と江藤先生のご高配に拍手を送ります。すなわち、一昨年、安孫子宜光先生が本会を代表して学会理事会へ出席され、また本会理事会へは学会常任理事の栗原英見先生が副席なされています。また、昨年6月の年度第3回学会常任理事会では、今年度の本会への例年通りの助成金交付が決定されており、7月のTorontoでのIADR Council Meetingへは江藤会長がオブザーバとして陪席されました。加えて、今年の秋に開催予定の本会企画シンポジウム「特定保健用食品の課題と展望(案)」へは、学会から後援名義が貸与される予定です。いずれ学会とともにFDIへの本会の参加も実現するかも知れません。さらなる関係の拡大が楽しみです。

末筆になりましたが、新たに就任された高野吉郎・会長および村上伸也・副会長のもとに、歯科医学における唯一の総合学会である本会がさらなる発展を遂げることを期待いたします。

なお、先日の本会理事会におきまして、この4月から(社)日本補綴歯科学会の理事長に就任いたします佐々木啓一教授(東北大)の理事への就任が決定されました。どうぞ、よろしくお願い申し上げます。

2年間、ありがとうございました。

2009年1月8日 記

### 3. 理事退任のご挨拶—IADR からJADRへ、JADRからIADRへ

山本 照子

(東北大学大学院歯学研究科顎口腔矯正学分野)

2001年から2008年の約8年間、会長をお務めになられた奥田克爾先生、安孫子宜光先生、大谷啓一先生、小田 豊先生をはじめ、JADR役員の方には大変お世話になりました。有り難うございました。また、理事会にご臨席下さり貴重なご意見を述べられ、常にJADRの進む方向をご示唆頂いた元IADR会長、作田 守先生ならびに黒田敬之先生の暖かいご指導を心より感謝申し上げます。

2006年に発行された50周年記念誌『JADRのあゆみ』を拝読

し、世界の歯科医学の進歩とともに歩んできたこれまでのJADRの発展の歴史が、携わられた多くの先人の努力の賜物であり、そのすばらしい偉業とJADRのなすべき使命にあらためて感銘致しました。今の日本の歯科医学の進歩は、50年以上も前に臨床と基礎学問の融合をはかり、さらに学際的に今後発展して行くための礎を築いたJADRによるところが大きく、その伝統を大切に、これからも、IADRの2つの使命、人類の健康を守る先端歯学研究の推進と、世界中の人々に健康をもたらすために国際地域への学術的支援をはかることこそを、まさにJADRの使命として受け継ぎ、世界の歯科医学・医療の牽引力となって進展させて行くことが必須であると感じております。

私とIADRの関わりは、1980年大阪ロイヤルホテルにて河村洋二郎先生が第58回IADR大会長として、大阪大学歯学部を挙げての国際事業に取り組まれた中で、ささやかなお手伝いにスライド映写係をさせて頂いたのが始まりでした。そのときに薄暗い映写室のなかで、IADRという国際学会が歯科医学の発展に多大な寄与することを鮮明に肌で感じました。そして、いまだ国際学会に参加したことのない私は、いつかこのような学会で発表をしたいと思ったことが記憶に残っております。その後人生初めての海外渡航に出て、口頭発表に選ばれ参加したのが1985年のIADR大会 (Las Vegas) でした。また、この時にIADR Plenary Lectureに招待されていたConnecticut大学の骨代謝研究の世界的権威であった亡きG. Rodan 先生に初めてお目にかかり、その後、私自身が希望した海外留学を受け入れて頂きました。このように、私の人生の大きな節目で、飛躍を与えてくれたのがIADRでありました。

その後、1994年作田 守先生が第41回JADR大会を主催し、特別講演に歯胚発生の世界的研究者であるHelsinki大学のI. Thesleff先生をお招きなされ、教室員としてJADR大会の準備に携わったのがJADRと関わりを持つ最初でした。そのようなIADRの日本部会JADRの理事としてご推薦頂き、2001年奥田克爾会長の元から、2003年安孫子宜光会長、2005年大谷啓一会長、2007年小田 豊会長の間理事として、JADRの運営に参画させて頂きました。学会の会務にかかわらせて頂く光栄に浴することが出来たことは大変幸せに存じております。理事在任中は、私自身の経験から、JADRの発展が日本の歯科医学研究を志す若い人を国際的に育てることに繋がると考え、微力ながら誠心誠意尽くさせて頂こうと思っておりました。2005年の第53回JADR総会・学術大会を、岡山大学創立五十周年記念館において開催させて頂きました。本大会では、11年ぶりにI. Thesleff先生を特別講演にお招きし、また、Journal of Dental Research編集委員長A.J. Smith先生には特別講演の他、若きJADR研究者に向けてJDR投稿に直接的に役立つワークショップも行って頂き、大変、好評でありました。IADR会長黒田敬之先生、JADR会長大谷啓一先生初め、役員の方の先生方のご支援と会員の皆様のご協力により本大会は成功裏に終了できました。

このころ、若手研究者の研究振興をはかることの意義が理

事会でたびたび議論され、それが、大学院生や若手研究者へのJADR学術奨励賞や、前田伸子先生主催の2007年JADR大会から始まったアジア・太平洋地域からの若手研究者へのJADR travel awardになってきています。また、ちょうど岡山大会から、Unilever/Hatton Award travel award competition で英語での口頭発表が義務づけられるようになり、JADRならでこそ、海外へ出なくとも、少しでも日本の大学院生や若い研究者が英語による発表の場に慣れる環境が作られました。日本の歯科医学研究は、すでに世界トップレベルであり、ただ、英語によるコミュニケーション能力がさらに養われれば、名実ともにトップになることは確実であろうと考えられます。

また、2002-2003年Constitution Committee, 2006-2009年Ethics in Dental Research Committee, Abstract Mentor of IADRなどのIADRの委員にもJADRよりご推薦頂き、本部の業務にも一部携わせて頂き、大変、貴重な経験をさせて頂きました。これまでのJADR役員の方の先生方のご厚情に衷心より感謝の念と御礼を申し上げます。なお、ご存知のとおり歯科関係の国際誌で最も高いimpact factorを誇るJournal of Dental ResearchがIADRの機関誌ですが、若い研究者を育てる上で、今後これの問題点の改革も期待しております。

国際学会の一つのdivisionであり、歯学研究の総合学会であることの利点を生かし、JADRがこれからの歯科医学を担う人々を国際的に育てることに役立ち、今後一層、歯科医学研究の進歩に大きく貢献、発展してゆきますことを心より祈念いたしております。

## 4. JADR理事を拝命して

佐々木 啓一

(東北大学大学院歯学研究科口腔システム補綴学分野)

高野会長のご高配によりJADR理事を拝命いたしました東北大学の佐々木です。この度は補綴歯科学会の理事長で、本会の前理事でありました平井敏博教授の後をうけ、補綴系の代表としての役回りであろうと思っております。私はこれまで一会員としてJADRに参加しておりましたが、この数年、その活動が変化し活発になっていることに大きな関心を持っておりました。特に、今年で2回目となるPAPFとの併催のJADR学術大会などはJADRの活動の明らかな変容を感じさせるイベントであり、注目しておりました。また学術大会に併催される公開シンポジウムも、積極的な社会への貢献という新たな姿勢と受け取っておりました。これらは、小田豊前会長が会長就任に当たって2007年のNewsletter1号に記されたように、会則に謳われた本会の趣旨であります「歯科医学および関連分野の研究の促進を図り、口腔保健の向上に寄与するとともに、国際的視野にたつてIADRの発展に貢献し、社会の公益に寄与すること」をまさに具現化しているものと感じております。

かつて、もう30年近く前になりますが、私が大学院生だった頃、これは東北大学のような当時としては新興の、地方の

大学に所属していた者だけの感想かもしれませんが、私どもにとって世界は遠く、JADRは唯一の「世界への窓口」でありました。JADR学術大会で発表すると、その抄録がJDR誌に掲載されることが本当に嬉しく、英語での抄録を苦勞しながら書いていたことを思い出します。その後、急速にグローバル化が進み、今ではIADRでの発表も大学院生にとって当たり前の時代になりました。現在では、JADRを通して私どもの研究を世界に発信するという意味合いはほとんどなくなっているのでしょう。

しかし一方では科学技術の進歩発展により研究領域がボーダーレス化し、異分野間での研究連携、さらには融合が進んでいます。また情報、交通の発展はかつての地理的な距離を飛躍的に短縮し、「国際的」という言葉さえ、もはや古い語感を放つようになってきました。このような時代にこそ、前述のJADRの趣旨が活きるものと、私は今、感じております。学会の集合体ではなく、歯科医学に関わる研究者が領域を問わず集い、語り合うことにより、真の意味での歯科医学の発展が期待できます。その先には歯科医学の再編、再構築があるのかもしれませんが。またPAPF、IADRを通してグローバルな歯科医学の発展に貢献できるものと思います。さらには、歯科医学の領域内のみではなく、歯科医学以外の多様な関連学問領域との連携、協力といった視点も今後ますます重要となります。このことにより、学問領域における歯科医学のグローバル化が図れるものと考えます。私は常々、JADRにはそのような活動にも、さらに積極的に関わっていただきたいと思っておりました。

新役員として、JADRのこのような活動の発展に少しでも貢献できればと考えております。何卒宜しくお願い申し上げます。

## 5. JADR新任理事として

西原 達次

(九州歯科大学健康増進学講座感染分子生物学分野)

平成21年より、高野吉郎会長のもとで、理事を務めさせていただくことになりました。これまで、国際歯科研究学会(IADR) General Sessionや日本部会(JADR)総会でのシンポジウム発表を通して、学会活動に協力させていただいてきましたが、今後は理事として本会の発展に貢献できればと思っています。

私自身は、これまで、歯周病細菌を中心とした研究活動を行ってきました。臨床講座の大学院生時代に、国立予防衛生研究所(現在の国立感染症研究所)の研究生として、歯周病に関する基礎研究を始めたことが私の研究者としての第一歩でした。当時の私にとって、基礎と臨床が融合したかたちで学会が運営されているIADR/JADRはとても大きい存在でした。これからも、本学会が若き大学院生諸君の夢を育む場として存在することが、これからの歯科医学の発展につながるものと信じています。そのために、私としては、これまでの

経験を活かしながら、理事の役割を果たしていければと思っています。

さて、本学会は、歯科研究学会として確固とした地位を確立していますが、これからの歯科医学の研究を見ずえると、歯科という枠組みを超えた研究、換言すると、学際領域に踏み込んだ研究が必要となってきます。このことは、多くの歯科研究者が認めるところだと思います。例えば、歯周病に関しては、歯周病の治療と予防につながる研究はもとより、歯周医学(Periodontal medicine)という概念のもとで、歯周病と全身疾患との関連が注目され、多くの研究成果が発表されています。一方で、歯学部教育においても、医学教育を充実させる必要性が指摘され、いくつかの歯学部・歯科大学で連携事業が展開されています。

このような状況を踏まえて近未来の歯科研究を考えた時に、我々は、歯科医学研究を行っていくなかで、躊躇せずに医学のみならず、様々な分野との連携を図る必要があるのではないのでしょうか。そのようななかで、平成20年9月1日に、九州歯科大学と九州工業大学は、両大学の学問の発展と教育研究の充実を図るために連携大学院協定を締結し、「歯工学連携教育研究センター」と「連携大学院」を設置しました。ここでは、両大学の特徴を活かして、大学院の教育科目を相互に提供し、お互いの生命科学教育を充実させるとともに、口腔内医療ツールの開発などを通して、次世代の優れた人材を育成していくことを主たる目的として掲げています。

このような大学間連携、あるいは学部間連携は、各大学で行われているところかと思いますが、単なる歯学部生き残り論に終わることなく、将来に向けて進化した形にしていく必要があります。とくに、これからは、歯科と他領域が連携して、国民の健康増進を目指した研究を遂行していくことが求められます。このような視点に立つと、JADRにおける研究の方向が見えてくるのではないのでしょうか。

それでは、このようなことを思い描きながら、これからのJADRの運営にご協力させていただきます。

## 6. JADR新理事として

吉江 弘正

(新潟大学大学院医歯学総合研究科 歯周診断・再建学分野)

この度、高野吉郎会長のもとで理事を務めさせていただくことになりました。たいへん光栄なことに感謝申し上げますとともに、よろしく願い申し上げます。

周知のように国際歯科研究学会(IADR)は、歯科医学に関する基礎と臨床の研究者が一同に会する、名実ともに世界をリードする学術団体であり、JADRはそのIADRを支える重要な役割を担っています。とくに我が国の若い研究者を育て、国際舞台での発表および活躍を最重要項目として活動していると認識しています。私は、新潟大学大学院医歯学総合研究科において、歯周病学・歯周治療学を担当し、また日本歯周

病学会の常任理事・医療委員長として仕事をさせていただいております。どちらかという臨床研究、臨床現場の面からこのJADRを盛り上げていくべき立場であると自認しておりますが、最近特に気になる点、制度と心の面から述べさせていただきます。

ひとつは、歯科医学の研究領域にまで経済理論が入り込んだことへの弊害と反省です。言うまでもなく今本邦におきまして、歯科を含めて医学・医療が変革のなかにあり、経済第一主義というか、市場原理主義的な考え方が、医療、教育そして研究の分野までも浸透してきております。「この研究はどのような役にたつのか」あまりに意識しすぎる感があり、また、一定の期間内における発表・論文の質と量による評価、競争、経費分配、ランキング、二極化を早急にすぎさせてしまっている現状とその反省でもあります。

さらにこの考え方が、学生、研究者や教育担当者さらには管理担当者のこころのなかに潜在的に入り込み、さまざまな影響が出ているのではないかと危惧している次第です。研究

の原点に立ち戻れば、「知的好奇心」と「面白いと思う感性」に尽きるに違いありません。

そのための環境整備がなにより重要なことであります。JADRが意識している研究者同志の会話・コミュニケーションの重視は、その具現化のひとつであると思います。

各論的、項目的には、次世代の研究者を支援していくために、ポストドクのポジション増員、先進的研究領域への資金増額、橋渡し研究の充実、専門医制度と基礎研究の整合性などが挙げられます。いずれも難題ではありますが、目先の損得に惑わされず、長期的視野で声を大にして主張していく時であると確信しています。

国が国として成り立つための肝要なふたつの柱は、「教育・研究」と「医療・福祉」であり、ここにはお金がかかることは当然のことであり、そのことにより安定した世の中になることを、現在の未曾有の不景気を経験することによって、多くのひとたちが気づき始めているのではないのでしょうか。

## VI. 第56回 JADR 総会・学術大会報告

### 1. 第56回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会報告

大会長 中垣 晴男

(愛知学院大学歯学部口腔衛生学講座)

輝かしい歴史と伝統のある国際歯科研究学会日本部会 (Japanese Association for Dental Research, JADR) の第56回の総会、学術大会を愛知学院大学歯学部で、昨年(平成20)年11月29日(土)・30日(日)、小田豊会長、高野吉郎副会長、理事、評議員、および、会員の皆様からのご支援をもちまして終了することができました。ここにお礼と報告申し上げます。

今回の大会は、演題申し込み101題、参加者316名でした。JADRは国際歯科研究学会 (International Association for Dental Research, IADR) として、1919 (大正8) 年に米国で設立され、レベルの高い雑誌 *Journal Dental Research* を発行している学会の日本部会です。このような本学会を本学で開催することは歯学部創立以来初めてであり、大変名誉なことで、名誉顧問に小出忠孝学長、顧問に野口俊英歯学部長、大会組織局に歯学部の27名の教授・特殊診療科教授にお願いし、全学挙げて準備させていただきました。今回の名古屋の大会では、大学の母体の曹洞宗の精神“道元”の禅の教えに従い「シンプル」を大会精神として学会を運営いたしました。特別講演、シンポジウム、発表、すべて内容的にはレベルの高いものとなり、Discussionも有意義でした。

今回は特別講演を3つ、シンポジウムを2つ企画しました。

特別講演はIADR会長のJ. M. ten Cate教授の「New developments in Dentistry and IADR」と題した講演、KADR会長であるByung-Moo Min教授の「Laminin-derived peptides: their biological applications and signaling pathway」と題した特別講演(招待講演)、もう一つは本学薬学部川島嘉明教授の「Nanomedical system developed with PLGA nanosphere platform」と題した特別講演でありました。IADR会長のJ. M. ten Cate教授は永年のdental caries研究の過去、現在、未来について、治療的な過去、予防的、そして、ナノテクノロジーや再生工学の将来についてのべ、IADRもそれを支援して、世界の人々の健康づくりに貢献していくという内容であった。Byung-Moo Min教授は、専門の立場からlaminin-derived peptidesの創傷治癒や皮膚再生への応用可能性について例をあげ講演された。川島嘉明教授はナ



来賓ならびに理事

ノテクノロジーでPLGA ,poly (lactide-co-glycolide) の開発と薬品, 化粧品への応用, 歯科におけるdelivery system応用可能性を触れた興味ある講演でした。

第一日目のシンポジウム1は、「Oral Biofilm Today」というテーマで、Chairpersons はJ.ten Cate教授と小生の中垣晴男が担当し、講師は英国のLeeds大学、Colin Robinson名誉教授の「Mass transfer within natural plaque biofilms:the role of plaque architecture」でoral biofilmの構造と物質の分布特性を講演、香港大学歯学部長のLakshman Samaranayake教授の「Can biofilm kill you?」として微生物学からoral biofilmの性質と為害性を分かりやすく講演、および、ドイツのJena大学のLutz Stoesser教授の「Fluoride content of dental plaque」でoral biofilmのフッ化物は唾液および、歯磨き剤のフッ化物濃度と深く関係している、歯垢中のフッ化物濃度を維持することの大切さを講演された。以上の3名の外国人講師に加えて、東北大学大学院の高橋信博教授の「Ecological dynamics of caries-associated oral biofilm:involvement of mutans streptococci and non-mutans bacteria」でdental cariesの成立機序とmutans streptococci および non-mutans の役割を述べられた。鶴見大学の花田信弘教授の「Oral biofilm formation, what goes on afterwards」でnanobacteriaの歯石形成への役割を講演された2名の日本人講師からなる、口腔のバイオフィーム研究の今日の状況と今後の方向を示すレベルの高いシンポジウムでした。2日目の30日の午前、大会もう一つのシンポジウムがもたれ、本学の戸苅彰史教授に企画をお願いし「Neural regulation of bone metabolism (神経活動による骨代謝制御)」に関するもので、chairpersonは戸苅彰史教授と東京医科歯科大学大学院の大谷啓一教授に担当お願いして、日本の世界に誇るトップ研究者の講師をお願いしていただきました。すなわち、愛知学院大学の戸苅彰史教授、東京医科歯科大学大学院の竹田 秀助教授、松本歯科大学宇田川信之教授、九州歯科大学の後藤哲哉助教授の5名の日本人講師によるシンポジウムでした。骨代謝とその神経支配について最先端の研究が紹介されました。

さらに、今回の一般演題はポスターとプレゼンテーションの両方を行う形式で行われました。すなわち、101題の研究発表は全てposter viewingとともに、パワーポイントでのスライド(3枚)を使った3分間の発表と5分間の質疑応答の時間を設けたORCA (European Organization for Caries Research) の発表形式で行われました。chairpersonの先生方のご理解と参加者の積極的参加により充実したdiscussion がもたれ目的が達せられました。これは少しでも若手の研究者にも“discussionを見て参加することができるのではと考えたためでした。このような発表形式を今後も継続していただけることを願っています。なお今回、バンコック空港占拠により来日できなかったタイの研究者があったが、日本以外に、韓国、中国、モンゴル、香港、ベトナム、フィリピン、タイ、バングラディッシュ、インド、イラク、オーストラリア、ウクライナ、ルーマニア、デンマーク、ドイツ、イギリス、オランダ、アメリカの18か



IADR President Prof. J.M. (Bob ten) Cateによる挨拶



シンポジウム1



Poster viewing の様子



Poster Discussion の様子



会員懇親会の鏡割

国からの参加者があったことも望外の喜びであります。

第一日目の29日午後はJADR学術論文賞 (Young Investigator Award) 5名の選考会, 懇親会での受賞者の発表, 今年度のJADRからのHatton award日本代表者の発表は, アメリカで行われる発表と同様に15分, ポスター発表のみで2日目の午後行われました。また, 2007年の鶴見大学での第55回大会から始まったJADR Travel Award第2回受賞者はDr.Q.Z.Jiang (中国), Dr.B.Huang (オーストラリア), Dr.S.Mashbaljir (モンゴル) (当日欠席) の3名で, 30日の懇親会会場で賞状を渡された。

愛知学院大学および歯学部の全面的支援の下に“シンプル”であるが若手研究者に研究への刺激が多い学会になるように努力していただきました皆様方のご協力・ご支援, さらに多数のご発表や参加に対して改めてお礼申し上げます。最後に, 高野吉郎新会長の下で新執行部がスタートされたJADRの今後の益々の発展を祈念します。

## 2. シンポジウムⅡ. 神経活動による骨代謝制御

大谷 啓一

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科硬組織薬理学分野)

学会2日目(11月30日)午前に行われた本シンポジウムは近年注目される骨代謝の神経活動による制御に焦点を絞り, 著名な研究者4人が最新成果を発表した。最初の演者であり座長を務めた愛知学院・薬理・戸苅彰史教授は神経活動と骨代謝制御の最新知見をまとめたあと, ご自身の研究を発表された。それによると末梢交感神経のアドレナリン作動性神経端末と骨系細胞は直接結合していること, 骨芽細胞の活性化にCaシグナルを介した $\alpha 1$ 受容体の関与が必須であることを明らかにした。2番目の演者である東京医科歯科・整形・竹田秀准教授は摂食調節ホルモン・レプチンが骨形成を負に制御しており, それは骨芽細胞における $\beta 2$ 受容体を介しておこなうことを詳細な実験により示した。このことは $\beta$ 遮断薬が骨粗鬆症治療に効果がある可能性を示しており興味深い。また新規神経ペプチド・ニューロメジンUがレプチンと協調して骨量を制御しており, そこには分子時計が関与するなど新たな知見を提供した。3番目の演者である松本歯科・生化・宇田川信之教授は破骨細胞における神経性アミノ酸・グルタミン酸の作用を発表した。破骨細胞に存在する小胞グルタミン酸トランスポーター (VGLUT) 1は, 骨吸収の際に生じる骨分解産物を運ぶ小胞にグルタミン酸を提供して小胞のトランスサイトosisに関与し, さらに細胞外に放出されたグルタミン酸は破骨細胞膜上の受容体を介してトランスサイトosisを抑制するというネガティブフィードバックシステムが機能していることを示した。4番目の演者である九州歯科・解剖・後藤哲哉准教授はニューロペプチドであるサブスタンスPやニューロキニンが骨芽細胞による骨形成を促進することを明らかにし,

その作用はNK-1受容体を介する可能性を示した。また破骨細胞形成におけるサブスタンスPの関与, 矯正治療など機械的刺激によるニューロペプチド放出が破骨細胞誘導因子RANKLを制御することを示した。さらに矯正治療時に生じる鈍い痛みと骨リモデリングとの関連を明らかにした。

以上本シンポジウムにおける4人の研究者による発表により神経活動の骨代謝制御メカニズムの一端が明らかになった。しかし神経活動は多岐にわたる複雑なネットワークを構築しており, 今回の発表で示されたように個々の神経活動の骨代謝におよぼす作用の一部が徐々に解き明かされてきてはいるが, その全貌を見るには程遠いと言わざるを得ない。このシンポジウムを契機として神経活動による骨代謝制御の研究がさらに発展することを期待したい。

## V. 2008年度JADR学術奨励賞を受賞報告

### 1. 2008年度学術奨励賞 (Young Investigator Award of JADR) を受賞して

岡田 彩子

(国立保健医療科学院口腔保健部/東京医科歯科大学大学院う蝕制御学分野)

この度は, 第56回JADR総会・学術大会において, 荣誉ある学術奨励賞を賜り, 光栄に存じます。

私どもの研究グループでは, 近年再燃の傾向がみられる口腔機能水に焦点を当て, 安全且つ効果的なるう蝕予防法の確立を目指す一方で, 複雑な構造及び多機能を持つう蝕 biofilmのメカニズムを探る研究を行っております。本研究はその一環であり, 従来とは異なる中性から弱アルカリ性を示す高濃度次亜塩素酸電解水に着目し, 有効塩素によるう蝕予防の可能性を広げ, さらに口腔内において安全に使用するためのガイドラインを提案いたしました。機能水は, 日本・韓国を中心に開発・研究が盛んに行われ, 現在では多種にわたります。このような機能水の発展に対し, 歯科における機能水としての成果を科学的に検証した事が, 本評価に繋がったのではないかと存じます。さらに本研究では, 近年注目を集めている二次元電気泳動を用いたタンパク解析を行い, う蝕病原菌或いはbiofilmへの影響に関して, いくつかの興味深いタンパク質へのダメージを確認し, 分子生物学へと研究内容を大きく展開させた点に関しても評価を頂けたのではないかと存じます。タンパク質は, 生命現象を司る基本物質であり, 疾患に関連するタンパク質を解析する事により, その機能を制御する因子を予測する事ができます。う蝕もまた多くのタンパク質と関わりを持ち, これらのタンパク質の解析に取り組む事により, う蝕予防の一助と成り得る事が期待されるため, 今後更なる研究を進めていく所存です。

本大会では, 若手研究者の育成を念頭においた, ポスター



発表後に口頭発表を行う新形式でありました。本形式により、多くの研究者の方々とdiscussionできた事は、今後の研究活動において貴重な経験でした。現在の若手研究者体制は、私のささやかな経験から見ますと、厳しい社会情勢の中で研究環境が整わず、思い通りに研究が進められない状況等が見受けられる様に思います。そういった中で、このような若手研究者にスポットが当てられた学会形式や奨励賞の機会がある事は、我々の世代にとって大きな励みになります。私に関しても、昨年大学院を修了し、研究に費やす時間を確保する事は難しくなりました。それでも多くの先生方の御指導を賜りながら、本大会・本賞を目指し、限られた時間の中で、思う存分に研究に打ち込める環境が私に与えられ、また壁にぶつかった際には相談できる体制が整っていた事が、この度の受賞に繋がった最大の要因ではないかと存じます。

最後に、研究の機会を与えて頂きました田上順次教授、研究の方向性を常に示して下さい下さった花田信弘教授、また実験にご協力頂きましたShawket ZAMAN先生をはじめとする研究室の先生方、そして“研究”を一から教えて頂き、本研究においても多大な御指導を頂きましたKhairul MATIN先生に、心より御礼申し上げます。

## 2. 2008年度学術奨励賞を受賞して

岡本 洋介

(岡山大学医歯薬学総合研究科インプラント再生補綴学分野)

この度は、学術奨励賞を受賞させていただき、大変光栄に思っております。

歯髄保護を目的とした覆髄は古くから行われてきた手法ですが、水酸化カルシウム製剤に代表されるこれまで臨床で用いられてきた薬剤は、生物学的に象牙質形成を促進させるものではなく、成功率は十分ではないとの報告もあります。したがって、近年、成長因子を用い象牙質形成促進を目標とした一種の再生医療研究が盛んに行われており、高い効果が報告されているものもあります。しかし、これら成長因子を用いた方法は、広く臨床応用はされているとは言えません。その原因として、成長因子の安全性やコストの問題があると考えています。

そこで本研究では、安価で安全性の確立された、高脂血症治療薬スタチンに着目しました。スタチンはコレステロール産生を抑制するだけでなく、BMP-2経路を介して、骨芽細胞や間葉系幹細胞の骨系分化促進効果を持つことが知られています。本研究では、象牙質形成能を有することで知られている歯髄幹細胞 (Dental Pulp Stem Cells; DPSCs) をヒトから分離し、代表的なスタチンであるシンバスタチンが本細胞の細胞動態へ与える影響を検討しました。その結果、至適濃度で作用させると、DPSCsにおいても既知のスタチンの作用経路であるメバロン酸-Rho経路を介して、アポトーシスを誘導することなく、細胞周期を制御することで増殖を抑制することを

確認しました。加えて、増殖抑制と同時に*in vitro*では象牙質シアラタンパクならびにオステオカルシン遺伝子の発現を促進させ、免疫不全マウスへの細胞移植実験では硬組織形成を促進することを明らかにしました。スタチンは血管新生作用、神経修復作用、抗炎症作用なども有することが知られており、今回得た結果をあわせて考えると、障害を受けた歯髄に対する象牙質/歯髄複合体の再生にはたいへん適した薬剤であると考えられます。

今後はスタチンでの象牙質形成メカニズムの解明および臨床に近いモデルでの検討により、臨床応用を目指したいと考えています。今回の受賞を励みにし、尚一層努力してまいりたいと思います。最後になりましたが、本研究の遂行にあたり、ご指導いただいた、窪木拓男教授をはじめ共同研究者の先生方に厚く御礼申し上げます。

## 3. 2008年度JADR学術奨励賞を受賞して

郡司掛 香織

(九州歯科大学健康促進科学専攻機能育成制御学講座  
顎口腔機能矯正学分野)

このたび2008年度学術奨励賞を受賞させていただき、ありがとうございます。受賞の対象となったのは“Nociceptive stimulation induces satellite glial cell activation”です。賞を頂けたことを大変光栄に感じております。

矯正的に歯を移動するときに痛みを伴うことはよく知られていますが、私はこの痛みと、骨代謝の関連について注目し研究を行っております。矯正的な歯の移動を行った場合に、三叉神経節ニューロンでは様々な変化が起こることが分かっており、我々の研究でも神経刺激としてラットの上顎臼歯を抜歯したときに三叉神経節上顎神経対応部のニューロンが知覚神経ペプチドSubstance Pを発現することを明らかにしました。また、このとき抜歯窩ではSubstance P陽性神経線維が現れ、骨代謝と知覚神経が関連していることが明らかとなっております。一方、三叉神経節の下顎神経対応部位ニューロンでは、下顎神経には何も刺激を与えていないにもかかわらず、上顎神経対応部位ニューロンと協調的にSubstance Pを発現することがわかりました。知覚神経節ニューロンは相互にシナプスを形成しておらず、ニューロンが直接細胞外に神経伝達物質を放出しているとは考えにくいので、これら上下顎神経対応部位のニューロンは間接的にコミュニケーションを行っていると考えられますが、明らかではありません。そこで、我々はこのコミュニケーションにsatellite glial cellが関与しているのではないかと考えました。Satellite glial cellは末梢性グリア細胞の1つで、ニューロンの周囲を鞘状に取り囲むように存在して、ニューロン間を隔てている細胞で、ATP、ブライジニンといった神経活性物質を輸送することが分かっています。そこで、今回の研究で上顎臼歯抜歯後の上下顎神経対応部位のニューロンの障害とsatellite glial cellの活性について

調べたところ、末梢神経の障害が、障害を受けたニューロンだけでなく、その周囲のsatellite cellも活性化させ、さらにはそこから離れた部位のsatellite cellも活性化することを明らかにしました。つまり、上下顎神経対応部位のニューロン間の情報伝達はsatellite cellが放出する細胞外伝達物質を介して行われているということが示唆されます。

この研究は、上下顎の骨代謝バランスの調節に三叉神経が関与していることを解明する上で非常に有意義であると考えます。今後はこれらのコミュニケーションに関係している物質の詳細な検索や、矯正的歯の移動を行った場合についても検討していきたいと考えております。

最後になりましたが、様々な機会を与えていただきました九州歯科大学後藤哲哉准教授、ならびにご指導御協力いただいた共同研究者の方々にあらためて御礼申し上げます。

#### 4. 2008年度学術奨励賞を受賞して

野谷 拓也

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科硬組織構造生物学分野)

この度、第56回JADR学術大会において、2008年度学術奨励賞を受賞させて頂きました。歴史ある学術大会において、このような賞をいただけたことを大変光栄に思います。

今回我々は、エナメル上皮細胞と歯髄細胞の分化機構を解明するために開発した新規共培養方法について報告させていただきました。

歯の発生は、未分化な口腔上皮と神経堤由来の間葉との相互作用によって制御されており、それぞれエナメル上皮細胞と歯髄細胞へ分化します。近年、器官の発生・形態形成にかかわる多くの分子が同定され、様々な培養系を用いて機能解析が進められております。しかし、生体内の前エナメル芽細胞や分泌期エナメル芽細胞が円柱化した背の高い細胞形態を示すのに対し、培養下でのエナメル上皮細胞は通常扁平形態を示します。我々は、この生体内と培養系におけるエナメル芽細胞の形態の違いが、従来から用いられてきた培養条件に起因すると考えました。そこで、歯胚の細胞培養系における上記問題を解消するために、歯髄細胞をタイプIコラーゲンゲルに分散させて三次元培養して、そのゲル上面にエナメル上皮細胞を積層させる新規共培養法「三次元・積層培養 three-dimensional and layered (TDL) 法」を開発し、以下の結果を得ました。つまりTDLゲルの組織観察から、(1) TDLゲルは培養開始から3日間で劇的に収縮した。(2) 培養3日目以降、歯髄細胞は細胞間隙を保持していたが、上皮細胞に隣接する部位では密に配列し、上皮細胞との間に明瞭な境界を形成した。(3) エナメル上皮細胞は立方状/低円柱状を呈し、境界に対して極性を示した。また、細胞間接着装置が発達し、PAS染色陽性および抗cytokeratin 14抗体、抗amelogenin抗体に免疫陽性を示した。(4) 境界付近の歯髄細胞も細胞突起を伸ばし分化傾向を示した。これらのことから、今回我々が開発した

エナメル上皮細胞と歯髄細胞の新規共培養法—TDL培養法—は、*in vitro*でありながら*in vivo*で見られるような細胞の増殖と分化を可能にし、歯胚を構成する細胞の組織再構築、上皮-間葉相互作用、細胞-基質相互作用などの研究に有用であることがわかりました。また、TDL培養法は、歯の発生だけではなく、上皮-間葉相互作用によって制御されている様々な器官発生の研究にも有用と考えております。

この度の受賞は、これからの研究活動に対する激励の意味も込められていると感じております。今後は今回の受賞を励みにし、さらに手法開発を進めながら、納得いく疑問に正面から取り組んでいく所存であります。最後になりましたが、これまで厳しくも熱心にご指導ご鞭撻くださいました高野教授、田畑准教授をはじめ、教室の諸先生方に、この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

#### 5. 2008年度JADR学術奨励賞を受賞して

湊 亜紀子

(東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎顔面矯正学分野)

この度は、栄えある2008年度のJADR学術奨励賞を受賞させて頂き、大変嬉しく思っております。学会会員ならびに評議員の先生方に心から感謝申し上げます。

私は現在、東京医科歯科大学大学院顎顔面矯正学の博士課程において、舌に対する触覚刺激に伴う脳活動の解析をテーマとして研究を行っております。ヒトの舌は、吸綴・咀嚼・嚥下や嘔吐などの相反する行動に関与する消化器官としての役割をはじめとして、吸息・呼息と同期した筋活動を示す呼吸器官、さらには発音・言語を媒体としたコミュニケーション器官としての役割も果たす多機能器官です。このように、舌は顎顔面領域の中でも、特に口腔機能に深く関与する器官であるにもかかわらず、触覚受容ならびにその中枢処理機構を検討した先行研究はごく僅かでした。一方、ものを咬むときに習慣的に使う側、いわゆる習慣性咀嚼側は、これまで末梢における偏向性として捉えられており、中枢の関与に関してはほとんど指摘されていませんでした。そこで、われわれは、習慣性咀嚼側という口腔機能における側性をキーワードとし、末梢すなわち舌における空間識別能と、中枢すなわち大脳皮質における活動パターンを関連づけて解析を進めて参りました。本研究から、舌に対する触覚およびそれに伴う脳活動と習慣性咀嚼側には密接な関連があることが示されました。すなわち、触覚に対する舌感覚の鋭敏さや、触覚刺激に伴う一次体性感覚野の賦活パターンは、習慣性咀嚼側に依存することが示唆されました。これらの結果は、日常的によく使う側の方が、末梢感覚が敏感であり、また、より敏感な末梢からの感覚投射を受ける側の大脳皮質の方が活動する領域が広いことを示しております。このことは日々の必要性や経験、トレーニングによって、末梢レベルでも中枢レベルでも機能を可塑的に高められることを示しており、咀嚼・発音訓練など

への応用が期待できると考えております。

今回の学会では、受賞のみならず、発表を通じて多くの先生方から研究に対するアドバイスをいただけたことは、私にとって非常に有益であり、研究の励みになりました。今後も尚一層研鑽して参りたいと思います。最後になりましたが、本研究の遂行にあたり、御指導、御協力いただきました先生方に厚く御礼申し上げます。



## VI. 2008年度JADR Travel Awardを受賞して

### 1. JADR Travel Award

Qian-zhou Jiang

(School of Stomatology, Wuhan University, Wuhan, China)

The 56th Annual Meeting of Japanese Association for Dental Research was held from November 28th to 30th in Aichi Gakuin University. I am very proud to get JADR Travel Award to join in. The award were planned to support each of the four PAPF divisions; Chinese division, Korean division, Southeast Asian division, and Australian/New Zealand division this time. The purpose of this award is to promote participation of more and more young researchers in the JADR activities. Dr. Huang from Western Australia University and I from Wuhan University, China got Award this year.

I am interested in the field of cariogenesis bacteria, Streptococcus Mutans. In this travel award, I present one of recent results about the distribution and genotypic diversity of mutans streptococci on different tooth sites in caries-free and caries-affected individuals. Our results showed that S. mutans genotypes were more prevalent in caries-free individuals than in caries-affected individuals. The frequency of genotypes which found in saliva between caries-free and caries-affected individuals was significantly different.

Japan is in the forefront of scientific research. It was very meaningful for me to attend this JADR meeting because many interesting lectures and studies were reported. I always recalled the music in the honorable Awarding Ceremony. And I also like Aichi Gakuin University for her beauty and peace. I am very appreciating Dr. Harou Nakagaki and Dr. Yutaka Oda and also thank to Dr. Kazuo Kato and Kanako Nakakura for their kindness.

JADR is the preferred platform for dental scientists to share their new findings and increased communication to international organizations. This meeting is greatly successful contribute to the scientific communication in the dental research between countries of PAPF divisions.

### 2. JADR Travel Award受賞報告

Boyen Huang (黄 博彦)

(Department of Paediatric Dentistry, School of Dentistry,

The University of Western Australia

(西オーストラリア大学歯学部小児歯科学講座)

Although attending the JADR 2008 Conference is not my first visit to Japan, it has been one of the most memorable. I am very appreciative, and kindly accept the honourable offer of a JADR Travel Award from the Japanese Association for Dental Research. In addition, I have been greatly inspired by the delicate and conscientious research attitudes and methods of several Japanese researchers that I was fortunate enough to collaborate with.

The project which I presented at the Conference is related to KTSND, a test of psychosocial nicotine dependence, among dental undergraduates. The assessment was originally developed in Japan and my task was to convert and apply it to a sample of Australian, English speaking students. With the help of Professor Koji Inagaki, Professor Chiharu Yoshii, Dr Masato Kano, Professor Toshihide Noguchi, Professor Haruo Nakagaki as well as the support from the University of Western Australia and the JADR, the study was successfully completed and presented.

In the future I will continue to participate in dental research and education between Japan and Australia, as well as my home country, Taiwan. The potential achievements of multi-national involvement in these fields were the highlights of the JADR 2008 Conference. Once again, thanks to the JADR.



## VII. 第27回IADR韓国部会 (KADR) 学術大会報告

JADR 副会長 村上 伸也

(大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座口腔治療学分野)

KADRとJADRは相互交流活動の一環として、毎年それぞれの学術大会に相互にinvited speakerを招聘し、学術交流を行っております。ご存じの通り、第56回JADR学術大会は、愛知学院大学の中垣晴男大会長の下、2008年11月29、30日の日程で開催されましたが、同学術大会にはKADRからのinvited speakerとしてByung Moo Min 教授 (KADR副会長, Department of Oral Biochemistry School of Dentistry, Seoul National University) が, "Laminin-derived Peptides: Their Biomedical Applications and Signaling Pathways" のタイトルで講演されました。

一方、今年の第27回KADR学術大会は12月1日にソウルで開催され、本年度は私がJADRからのinvited speakerということで講演の機会を頂戴することとなりました。今年はJADR, KADR両学術大会が連続した日程で開催されることになった

ため、先のByung Moo Min 教授は、同じくJADR学術大会の invited speakerとして来日されたJ. M. ten Cate 教授 (IADR会長, Academic Centre for Dentistry Amsterdam) をお連れして、JADR学術大会終了後直ちに中部国際空港よりソウルへ向かわれることとなりました。私は、関西国際空港よりソウルへ向かい、仁川国際空港で朱 成淑 (Department of Oral Anatomy, School of Dentistry, Kyung Hee University) 先生のお出迎えを受け、学術大会会場に隣接するホテルへ連れて行っていただきました。私にとっては二度目のソウル訪問でありましたが、「こんにちは」と「ありがとう」程度のハングル語を話すのがやっとなので、車中で朱 先生から、翌日の挨拶の準備にと、にわかハングル語レッスンを受けました。その夜は、J. M. ten Cate IADR会長と共に、懇親会に招待されました。KADR会長のJaeo Cho教授 (Department of Oral Pathology, School of Dentistry, Kyung Hee University), Byung Moo Min 教授に加えて、韓国歯科医学界の長老会員の先生も多数ご参加くださり、和やかな会となりました。過去に日本への留学経験をお持ちの先生もたくさんおられ、留学当時の楽しい思い出をお話くださり、歯科界での日韓交流の系譜の一端を知る思いがいたしました。会も酣となりますと、そこかしこで「乾杯 (コンペ)」と声が上がります、大いに懇親を深めて参りました。

翌日早朝より、KADR学術大会が開催されました。今年も、ソウル市江南地区にあるConvention and Exhibition Center (COEX コエックス) で開催されました。

今回のKADR学会プログラムは、午前と午後特別講演が1題ずつ、午前にシンポジウム"Leading Edge for Dental Research"の講演が5題と午後ポスター発表が18題組まれておりました。Jaeo Cho教授の開会挨拶に続いて、執行部の先生方のご高配により、J. M. ten Cate IADR会長と共にKADR会員の先生方へご挨拶する機会を頂戴しました。JADRの代表として「KADR-JADRの双方にとって有益な相互交流が、将来にわたって継続し、発展していくことを祈念しています。」とのメッセージをお伝えいたしました。

午前の特別講演は、J. M. ten Cate IADR会長が「Biofilms, a novel way to look at dental plaque」のタイトルで行われ、私はその日の午後に「Periodontal tissue regeneration by basic Fibroblast Growth Factor (FGF-2)」のタイトルで講演を行いました。講演では、塩基性線維芽細胞増殖因子 (FGF-2) を用いた、新規歯周組織再生療法確立に向けた取り組みの現状と将来に向けた展望をお話しさせていただきました。韓国でも再生医学・再生医療に対する関心は大変高いようで、講演後、実に多くの質問をいただきました。また、直後の閉会式では安孫子宜光先生が、IADR Regional Board memberとして閉会の辞を述べられました。

また、両特別講演の合間に、Jaeo Cho 教授ならびにByung Moo Min 教授からお誘いを受け、J. M. ten Cate IADR会長と共に、学会場であるCOEXの全貌を見学させていただきました。COEXは名前の通り、日本でいうところの幕張メッセのような大コンベンションセンターです。現在、KADRは2016年度の

IADR学術大会開催候補地の一つとして名乗りを上げているところで、その際の学会場としても、このCOEXを予定しているとのことでした。IADR学術大会開催に向けた熱い思いと自信が、両先生の説明から、ひしひしと伝わって来る思いがいたしました。

今回、KADRからご招待を受け、KADR学術大会にinvited speakerとして参加させていただく機会を得、多くの韓国の歯学研究者と接し、同国の歯学研究のactivityの高さを肌で感じることができました。また、今回の訪韓を通じて、多くの先生方と知り合い、JADRとKADRの今後の交流活動について直接意見交換ができましたことは、JADRの執行部の一人として大変貴重な経験となりました。是非この経験を、将来のJADRの活動に活かしていきたいと考えております。



Byung Moo Min 教授よりplaque授与

## VIII. 理事会、評議員会および総会報告

### JADR前幹事 服部 雅之

(東京歯科大学歯科理工学講座)

昨年度は、理事会が4回(2月18日, 5月26日, 8月25日, 11月28日), また臨時理事会が2回(11月14日, 11月29日)開催されました。

評議員会および総会が第56回JADR学術大会開催時(11月29日)に開催されました。

会に先立ち、議事録署名人の選出があり、三浦宏之先生(東京医科歯科大学大学院), 松村英雄先生(日本大学)の2名が選ばれました。また、評議員会成立のための定足数を満たしている旨、小田議長より説明がありました。

#### 2009 Hatton Awards候補者の紹介

以下の5名が2009 IADR Miami総会の候補者として選出されました。

#### Junior Category

小島 佑貴(東京歯科大学4年)

## Senior-Basic Category

泉谷 尚美 (大阪大学大学院歯学研究科口腔分子感染制御学講座)  
 小森 令賀 (神奈川歯科大学小児歯科学講座)  
 古田 信道 (大阪大学大学院歯学研究科先端機器情報学教室)  
 八木 優子 (東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科顎顔面矯正学分野)

## 2008年度会計決算および2009年度予算案

会計決算は、栗石 聡監事ならびに安孫子宜光監事による監査承認後、第4回理事会承認を経て、評議員会および総会において承認されました。また予算案に関しても第4回理事会で承認を経て、評議員会および総会にて承認されました。

## 2009年度事業計画

以下の2009年度事業計画が提案され承認されました。

- 総会・評議員会：11月
- 理事会：4回開催 (2, 5, 8, 11月)
- 学術大会：第57回学術大会 (第2回PAPF学術大会と併催、中国・武漢) 9月22日～24日
- 企画シンポジウム：11月21日または28日
- 各種委員会：学術奨励賞選考委員会、倫理委員会準備会
- Newsletter：2回発行 (2, 8月発行予定)
- Mail News：4回発行 (2, 5, 8, 11月配信予定)
- KADR (韓国部会) 学術大会へ講師派遣
- IADR2009年度評議会へ役員派遣
- PAPF2009年度運営委員会へ役員派遣
- 2010年度Hatton Award候補者選考
- IADR各種Committeeへ委員推薦
- JADR Annual Report をIADR本部へ報告

## 次期役員および評議員について

役員選出規定に従い下記のJADR次期役員(案)が上程され、第4回理事会の議をへて、評議員会で承認されました。また役員選出規定に従いJADR新評議員の選出が行われ、理事会の推薦をへて会長がこれを委嘱いたしました。任期は、いずれも2009年1月1日から2010年12月31日までです。

## 役員名簿 (2009-2010) (敬称略)

会 長 高野 吉郎 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科生体硬組織再生学硬組織構造生物学分野

副 会 長 村上 伸也 大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座口腔治療学分野

前 会 長 小田 豊 東京歯科大学歯科理工学講座

会 計 理 事 高橋 信博 東北大学大学院歯学研究科口腔生物学講座口腔生化学分野

理 事 佐々木啓一 東北大学大学院歯学研究科口腔機能形態学講座口腔システム補綴学分野

佐野 司 東京歯科大学歯科放射線学講座

田上 順次 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科摂食機能保存学講座う蝕制御学分野

中 嶋 裕 明海大学歯学部機能保存回復学講座歯科生体材料学分野

西原 達次 九州歯科大学感染分子生物学分野

花田 信弘 鶴見大学歯学部探索歯学講座

前田 伸子 鶴見大学歯学部口腔細菌学講座

吉江 弘正 新潟大学大学院医歯学総合研究科歯周診断・再建学分野

監 事 安孫子宜光 日本大学松戸歯学部生化学・分子生物学講座

大谷 啓一 東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科生体硬組織再生学講座硬組織薬理学分野

## 評議員名簿 (2009-2010) (敬称略)

|          |       |
|----------|-------|
| 北海道医療大学  | 安彦 善裕 |
| 北海道大学    | 亘理 文夫 |
| 岩手医科大学   | 田中 光郎 |
| 東北大学     | 島内 英俊 |
| 奥羽大学     | 浜田 節男 |
| 明海大学     | 渡部 茂  |
| 日本大学松戸   | 平澤 正知 |
| 東京医科歯科大学 | 三浦 宏之 |
| 東京歯科大学   | 石原 和幸 |
| 日本歯科大学   | 砂田 勝久 |
| 日本大学     | 松村 英雄 |
| 昭和大学     | 五十嵐 武 |
| 神奈川歯科大学  | 浜田 信城 |
| 鶴見大学     | 桃井 保子 |
| 新潟大学     | 興地 隆史 |
| 日本歯科大学新潟 | 加藤 喜郎 |
| 松本歯科大学   | 上松 隆司 |
| 朝日大学     | 山本 宏治 |
| 愛知学院大学   | 戸苅 彰史 |
| 大阪歯科大学   | 山本 一世 |
| 大阪大学     | 高田 健治 |
| 岡山大学     | 窪木 拓男 |
| 広島大学     | 岡崎 正之 |
| 徳島大学     | 田中 栄二 |
| 九州歯科大学   | 柿木 保明 |
| 九州大学     | 石川 邦夫 |
| 福岡歯科大学   | 佐藤 博信 |
| 長崎大学     | 中山 浩次 |
| 鹿児島大学    | 鳥居 光男 |
| 千葉大学     | 丹沢 秀樹 |
| 慈恵医科大学   | 杉崎 正志 |

(アンダーラインは理事会推薦評議員)

## 会則の改定

会則16条 役員選出規定改訂案が提案され、承認されました。  
(下記参照)

## 役員選出規定 (太字が現行からの変更部分)

## &lt;現行&gt;

会則第16条に定める役員は次の方法により選出されるものとする。

1. 次期会長は、会長の任期終了2年前までに、正会員の投票により選出する。
2. 次期会長を選出するために次期会長選考委員会を理事会の下に設置し、理事・評議員計7名で構成する。委員長は互選とする。
3. 次期会長選考委員会は正会員（会長経験者を除く）の中から本会への貢献度や経験などを考慮して複数名からなる次期会長候補者名簿を作成する。
4. 次期会長候補者名簿に掲載された者を正会員の投票に付き、最高得票数の者を次期会長とする。

## &lt;改定案&gt;

会則第16条に定める役員は次の方法により選出されるものとする。

1. 次期会長は、会長の任期終了2年前までに、正会員の投票により選出する。
2. 次期会長を選出するために次期会長選考委員会を理事会の下に設置し、理事・評議員計7名で構成する。委員長は互選とする。
3. 次期会長選考委員会は正会員（会長経験者を除く）の中から本会への貢献度や経験などを考慮して複数名からなる次期会長候補者名簿を作成する。
4. 次期会長候補者名簿に掲載された者を正会員の投票に付き、**理事会の議をへて評議員会の承認を得る。**

## 名誉会員および終身会員推挙

奥田克爾東京歯科大学名誉教授が名誉会員に推挙され、承認されました。総会において、プラークの贈呈が行われました。

また会則に従って、以下の先生が終身会員として、理事会より推挙され、評議員会および総会において承認されました。(氏名50音順、敬称略)

笠原 泰夫, 榊 鉄也, 戸田 忠夫, 永井 教之

## 前大会長へのプラーク贈呈

第55回大会長の前田伸子教授へ感謝のプラークが贈呈されました。

## IX. 第57回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会／第2回 PAPF学術大会のご案内

第57回JADR総会・学術大会は、2009年9月に中国、武漢 (Wuhan) で開催される第2回IADR Pan Asian Pacific Federation (PAPF) 学術大会と併催で行われます。したがって、本年は国内の学術大会は開催されませんので、あらかじめご了承くださいませよう、お願いいたします。なお、第2回PAPF学術大会の詳細ならびに本年度総会につきましては、ホームページおよびメールニュースにて改めてご連絡させていただきます。JADR会員の皆様の積極的な参加を期待します。なお、演題応募締切は2009年5月1日 (金) となっておりますので、予めご

了承ください。

### The 2nd Annual Meeting of IADR Pan Asian Pacific Federation

Date: Sept. 22-24, 2009

Venue: Wuhan Science & Technology Conference and Exhibition Center, Wuhan, China

Abstract Submission Deadline: Friday, May 1, 2009

Host: IADR Pan Asian Pacific Federation IADR / China

Co-host: IADR / Japan IADR / Korea

IADR / South East Asia, IADR / Australia-New Zealand

Organizer: Chinese Stomatological Association IADR Chinese Division School of Stomatology, Wuhan University

Chairman: Prof. Fan Mingwan

Co-Chairman: Prof. Bian Zhuan

Further information will be available on the web: <http://www.PAPF2009.cn>

\* 2009年度学術奨励賞は例年と同様に実施いたします。詳細はJADRホームページへ掲載しますので、ご興味がおありの方は奮ってご応募ください。

## X. JADR企画シンポジウム開催のご案内

世話人 花田 信弘 (鶴見大学歯学部探索歯学講座)  
前田 伸子 (鶴見大学歯学部口腔細菌学講座)

会員の皆様には益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。さて、JADR企画シンポジウムを下記の要領で開催いたしますので、多数ご参加下さいますようご案内申し上げます。

会 期：2009年11月21日 (土) 午後1時00分～5時00分

会 場：鶴見大学会館

〒230-8501 横浜市鶴見区鶴見2-1-3

電話：045-581-1001 (代表)

主 催：国際歯科研究学会日本部会 (JADR)

共 催：日本歯科医学会

主 題：特定保健用食品と口腔保健

詳細は、JADRホームページ (<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadr/>) にてお知らせいたします。

## XI. 第87回IADR総会・学術大会 (Miami, Florida) のレポーター募集

ご存知のとおり2009年4月1日 (水)～4日 (土)、Miami (Florida) で第87回IADR総会・学術大会が開催されます。つきましては、JADR 会員の先生方からIADR 大会の様子など9月発行予定のJADR Newsletter第2号にご紹介いただきたくご案内いたします。総会へ初めて参加される方からでも大歓迎です。レポーターをお引受けいただける先生は、大会報告を4月27日 (月) までに事務局へお送り下さい。多数お待ちしております。

字 数：1200字程度 締切：4月27日 (月)

執筆内容：第87回IADR Miami大会に各自が参加した分

野の報告。シンポジウム、ポスター、口頭発表などから自由に記載 (過去のニュースレター参照)

原稿送付方法：TEXT fileかMS WORDで、E-mailにて事務局へ送付

## XII. Hatton Award 応募候補者 (2010年度IADR, Barcelona, Spain) の募集

2010年度のHatton Award応募候補者を募集します。

応募ご希望の方は4月以降にHPに掲載します応募要領をご覧の上ご応募下さい。応募募集は8月頃より開始する予定です。

本賞は第10代IADR会長Edward Hatton博士の功績をたたえて設けられた若手研究者を顕彰するための賞です。応募カテゴリーは、Junior部門、Senior- Basic Science部門、Senior-ClinicalResearch部門の3部門です。各Divisionから推薦を受けた候補者は第87回IADR総会の前日に行われるHatton Award本選にてPoster-Discussion形式での審査を受け、各部門上位2名が順位付けで受賞者に選ばれます。

なお、各部門への応募資格と研究内容の区分は、以下のようになります。

Junior 部門：

歯学部学生による研究発表です。歯学部在籍中に行った研究が対象となります。基礎研究、臨床研究を問いません。

Senior 部門：

大学院在籍者、研究生、専攻生等による研究発表です。

博士号既得者の場合、本選時に博士号取得後3年以内であれば応募できます。

Senior 部門は、下記2つの分野に分かれます。

- Basic Science Research: Involving laboratory or animal research
- Clinical/Pre-clinical Research: Involving research on human subjects and/or epidemiologic studies

## CONTENTS

|  |    |   |    |
|--|----|---|----|
| I. 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 会長に就任して                             | 1  | I. A Remark from New President of JADR<br>Dr. Yoshiro Takano: JADR President  | 1  |
| II. JADR会長任期を終えて 貴重な2年間の経験                                 | 2  | II. Experience as President of JADR<br>Dr. Yutaka Oda: JADR Past President  | 2  |
| III. 新任・退任理事からの挨拶  | 2  | III. Greetings from Director new appointment / retirement   | 2  |
| 1. JADR退任理事からの挨拶   | 2  | 1. Greeting from Director retirement<br>Dr. Michiharu Daito: JADR Past Director   | 2  |
| 2. JADR理事の退任にあたって  | 3  | 2. On the JADR director retirement<br>Dr. Toshihiro Hirai: JADR Past Director   | 3  |
| 3. 理事退任のご挨拶—IADR からJADRへ, JADRからIADRへ                      | 3  | 3. Greeting from Director retirement—from IADR to JADR,<br>from JADR to IADR<br>Dr. Teruko Yamamoto: JADR Past Director                             | 3  |
| 4. JADR理事を拝命して   | 4  | 4. Be ordered Director JADR<br>Dr. Keiichi Sasaki: JADR Director  | 4  |
| 5. JADR新任理事として   | 5  | 5. As the New JADR Director<br>Dr. Tatsuji Nishihara: JADR Director   | 5  |
| 6. JADR新理事として  | 5  | 6. As the New JADR Director<br>Dr. Hiromasa Yoshie: JADR Director   | 5  |
| IV. 第56回JADR総会・学術大会報告                                      | 6  | IV. Reports of the 56th JADR General Session  | 6  |
| 1. 第56回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会報告                       | 6  | 1. Summary of the 56th Academic Meeting of JADR<br>Dr. Haruo Nakagaki: Chairman of the 56th Academic Meeting of JADR                                | 6  |
| 2. シンポジウムⅡ “神経活動による骨代謝制御”                                  | 8  | 2. Symposium Ⅱ "Neural Regulation of Bone Metabolism"<br>Dr. Keiichi Ohya: Tokyo Med. Dent. Univ.   | 8  |
| V. 2008年度JADR学術奨励賞を受賞報告                                    | 8  | V. 2008 JADR Young Investigator Award   | 8  |
| 1. 2008年度学術奨励賞 (Young Investigator Award of JADR) を受賞して    | 8  | Dr. Ayako Okada: Tokyo Med. Dent. Univ./ National Inst. of Public Health  | 8  |
| 2. 2008年度学術奨励賞を受賞して  | 9  | Dr. Yosuke Okamoto: Okayama Univ.   | 9  |
| 3. 2008年度JADR学術奨励賞を受賞して                                    | 9  | Dr. Kaori Gunjigake: Kyushu Dental College  | 9  |
| 4. 2008年度学術奨励賞を受賞して  | 10 | Dr. Takuya Notani: Tokyo Med. Dent. Univ.   | 10 |
| 5. 2008年度JADR学術奨励賞を受賞して                                    | 10 | Dr. Akiko Minato: Tokyo Med. Dent. Univ.  | 10 |
| VI. 2008年度JADR Travel Awardを受賞して                           | 11 | VI. 2008 JADR Travel Award  | 11 |
| 1. JADR Travel Award                                       | 11 | Dr. Qian-zhou Jiang: Wuhan Univ. China  | 11 |
| 2. JADR Travel Award受賞報告                                   | 11 | Dr. Boyen Huang: The Univ. of West. Australia   | 11 |
| VII. 第27回IADR韓国部会 (KADR) 学術大会報告                            | 11 | VII. Report of the 26th KADR Academic Meeting<br>Dr. Shinya Murakami: JADR Vice-President   | 11 |
| VIII. 理事会, 評議員会および総会報告                                     | 12 | VIII. Report of the Board Meeting, Annual Business Meeting and the Councilors Meeting.<br>Dr. Masayuki Hattori: JADR Past Deputy Executive Director | 12 |
| IX. 第57回国際歯科研究学会日本部会 (JADR) 総会・学術大会/第2回PAPF学術大会のご案内        | 14 | IX. Announcement of the 57th JADR General Session/ Second Meeting of IADR PAPF  | 14 |
| X. JADR企画シンポジウム開催のご案内                                      | 15 | X. Announcement of the JADR Symposium   | 15 |
| XI. 第87回IADR総会・学術大会 (Miami, Florida) のレポーター募集              | 15 | XI. Call for Reports of the 87th IADR General Session in Miami  | 15 |
| XII. Hatton Award 応募候補者 (2010年度IADR, Barcelona, Spain) の募集 | 15 | XII. Call for the Hatton Awards Competitors of the 88th IADR General Session in Barcelona, Spain (2010) from JADR                                   | 15 |

## ●編集後記●

今号より、高野会長よりJADR Newsletterの編集を引き継いでいただくことになりました。1月より、高野会長の下、新執行部の活動が開始されましたので、本年最初のNewsletterでは、新旧理事の先生方のご挨拶文を掲載させていただきました。それぞれの先生方が主たる活動の場として所属しておられる各々の専門分科会の活動と比べますと、JADRの活動内容は、まだ十分に認知されていない状況にあると言わざるを得ません。このNewsletterがJADRをよりよく理解していただく一助になればと考えております。ペーパーレス化の推進が叫ばれている中、紙媒体での情報提供の意義が改めて問われている昨今、会員の先生方に待ち遠しいと思っただけの紙面作りを検討していきたいと考えております。もし、何かご意見・アイデア等ございましたら、事務局までご一報いただければ幸いです。

発行 国際歯科研究学会日本部会 (JADR) <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jadr/index.html>

連絡先: 〒612-8082 京都市伏見区両替町2-348-302

アカデミック・スクエア (株) 内 TEL: 075-468-8772 FAX: 075-468-8773

JADR副会長 村上 伸也 (大阪大学大学院歯学研究科口腔分子免疫制御学講座口腔治療学分野)

連絡先: 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘1-8 FAX: 06-6879-2934

2009年2月28日 発行